The 33th Annual Meeting of the Ishikawa Prefecture Clinical Cytology

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-12-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/47875

『学会開催報告』

第33回石川県臨床細胞学会

The 33th Annual Meeting of the Ishikawa Prefecture Clinical Cytology

金沢大学附属病院 病理診断科/病理部
池　田　博　子

平成29年2月11日（土祝日）11:00～17:00に金沢大学附属病院 宝ホールにて第33回石川県臨床細胞学会を開催いたしました．石川県臨床細胞学会にはスクリーナーと呼ばれる細胞検査士，病理医や産婦人科医などの細胞診指導医が所属しており，毎年この時期に指導医が世話人となり，会員の細胞診断レベル向上を目的とした臨床細胞学会を開催しています．例年どおり，演題発表，スライドセミナー，教育講演がプログラムされ，今回は特別講演を加え，開会しました．

11:00から宝ホールホワイエに設置した顕微鏡でスライドセミナー2題の標本鏡検が始まりました．スライドセミナーは担当指導医が症例を選択し，細胞診スライドを指定解答者であるスクリーナーに予め送付します．指定解答者は経験の少ない若手スクリーナーが選出されることが多く，解答者は学会当日までに代表的な細胞像の写真をスライドとし，細胞診のプレパラートを学会に持参，参加者は13:00までにプレパラートの鏡検を済ませます．セミナーでは指定解答者が細胞診の所見をスライドで呈示し，臨床情報とあわせて推定疾患を発表します．その後，指導医による細胞像，組織検査による病理診断の解説となります．今回はセミナー①は金沢大学からplacental site trophoblastic tumor (PSTT)，セミナー②は金沢医科大学からproliferating pilomatricomaが出題されました．いずれも稀な疾患で，貴重な症例の細胞像をみる良い機会となりました．

13:05より金沢市立病院，公立松任石川中央病院，国立病院機構 金沢医療センター，金沢大学附属病院，金沢医科大学，石川県立中央病院の6施設から一般演題の発表がありました．頻度の少ない疾患の細胞像の検討，細胞診検体での免疫染色やFISHによる診断の試み，細胞診判定と組織診断の不一致例の詳細な解析など，若手臨床検査技師が発表し，フロアからはベテラン医師による貴重なコメント，アドバイスが寄せられました．

14:20からの総会では事務局より，幹事会報告，入会者紹介，会計報告，来年度学会開催予定の説明があり，次年度世話人が挨拶されました．

14:50から松波総合病院 病理診断科部長 齋尾征直先生による教育講演がありました．タイトルは『SILと鑑別の必要な子宮頚部の異型扁平上皮の鑑別ポイントとその細胞像』です．まず齋尾先生がスクリーナーからよく聞かれる質問を呈示され，それに対する答えの形で問題点を呈示いただきました．クロマチンパターンや核小体，核溝による良悪の鑑別，異常細胞のクロマチンパターンの分子学的構造などをシェーマや典型的な細胞像の写真を呈示しながら丁寧に説明していただきました．診断に有用なクロモセンター，Nuclear clearing，篩状クロマチンなどのキーワードがしっかりと心に刻まれました．後半は日常診療で最も見る機会の多い子宮頚部細胞診について，扁平上皮内病変 squamous intraepithelial lesion (SIL) とその鑑別疾患を中心にお話しいただきました．細胞診で高度扁平上皮内病変 high-grade SILとする異型細胞は組織学的に子宮頚部上皮内腫瘍 cervical intraepithelial neoplasia (CIN) のうち，CIN2, CIN3と呼ばれるhigh-grade dysplasia, carcinoma in situを推定しています．治療を要する疾患群で，high-grade SILを正確に検出することが重要です．しかし，未熟扁平上皮化生，修復細胞，萎縮扁平上皮など良性細胞でありながら，high-grade SILに類似する細胞像をとる病変があり，これらとCINを見分けるには通常，かなりの経験，トレーニングを要します．齋尾先生は前半にお話しされた基本的な細胞所見に基づいてhigh-grade SILと良性病変との違いを解説され，診断の補助としてp16などの免疫染色の有用性を紹介いただきました．日々悩みながら細胞を見ている私にとって，新たな知識も加わり，とても貴重な講演となりました．フロアから非典型例に遭遇したときの対処法，化生細胞，SILの発生とstem cellとの関連性についての質問があり，興味深い討論がありました．

16:15から金沢大学附属病院 呼吸器内科 臨床教授の笠原寿郎先生よる特別講演がありました．タイトルは『肺癌薬物療法と病理・細胞診-相互理解がより良い診療を生む-』です．肺癌治療の歴史，現状をデータやグラフでわかりやすく説明していただき，現在の肺癌治療における病理検査の重要性を，実際に化学療法，分子標的治療を行っている臨床医の立場からお話いただきました．私が病理医として働き始めた頃，肺癌は材料が少ない，分化度が低いなどの原因で組織型確定ができなくても，化学療法を施行する症例は小細胞癌と非小細胞癌に分けられれば大丈夫でした．しかし，現在は肺癌研究，薬剤の進歩に伴い，多彩な治療薬が開発されており，その選択には非小細胞癌に含まれる扁平上皮癌，腺癌，大細胞癌の病理診断を要します．講演をうかがって病理検査の重要性が増していることがよく理解でき，検査を担う私たちにとっては身が引き締まる思いでした．また，最近は肺癌の背景となる遺伝子異常が解明されつつあり，ALK肺癌などでは責任遺伝子をターゲットとした分子標的薬が著効する症例があることが知られています．ALKは病理検体を用いた免疫染色，FISH検査で検出されますが，手技的問題や判定が難しい症例があり，疑陽性または偽陰性となることがあります．細胞像との比較，検査過程の理解，臨床とのコミュニケーションをとることが正確な診断に重要であると再認するとてもよい機会となりました．笠原先生には最新の情報を含めてお話しいただき，参加者からの検体の提出，保存，診断報告方法，検査機器の選択など様々な質問に臨床医の立場から丁寧にお答えいただきました．心より感謝申し上げます．

参加人数は104名で，細胞診を学ぶとても良い場になったと思います．最後にプログラム作成や会場準備，当日の運営に尽力してくれた病理部スタッフの皆様に深く感謝いたします．



